ヒトごろし

1

浅黒い指が白い頸に喰い込む。
張りがある皮膚には皺が寄ることがない。ただ腹や乳房のように弾力がある訳ではない。
筋がある。幾本もの筋が束になっている。その束の中心には空洞があるのだ。でも、これだけ締め付ければ、それも塞がっているだろう。
そしてその背後には骨がある。
四本の指は骨を感じている。
親指は筋を掻き分けるようにして頸にめり込んで行く。
ぐうと女は声を上げる。いや、これはもう声ではない。単に女が鳴ったというべきか。これ程潰れて歪んだ咽喉に、息など通るものではないだろう。
燈は薄く、世間の色などは殆ど失われているけれど、それでも女の顔が紅潮していることだけは判った。
小鼻が幾度も収縮して、女は眼を大きく見開いた。
白目が濁って見える。
血走っているのだ。
半開きだった口も横に縦に広がっては閉じ、別の生き物のようだ。

これはまた滑稽な顔だなと歳三は思った。それ以外、何の想いも涌いては来なかった。
途端に気が萎えた。
萎えるのと同時に、女は思い切り手足をばたつかせ、それこそ満身の力を籠めて歳三の腕を掴み、振り解いた。
振り解かれた腕の、右の指先が畳に当って硬い音を発した。
番ったまま片手を突いて半身を起こす。こうなるともう、どうでも良くなる。
身体を離した。
そのまま女に背を向けて、胡坐をかいた。ごそごそと動く音と喘ぎ声が聞こえた。
死にかけの虫のように足掻いているのか。
しゅうと松風のような音を出した後、女は嘔吐き、噎せた。汚らしい音だと思う。汚らしいのは歳三の好むところではない。
振り向いて肩越しに見ると、やはり女は汚らしかった。洟だの涎だのが糸を引いている。
手の届く先に女の襦袢があったので、手繰り寄せて羽織った。寒かった訳ではない。
女と己を遮断したかっただけだ。
わやわやという音がやがて女声になって、そのうち言葉になった。
何をするのサというようなことを途切れ途切れに言っている。
あまり大声を出されるのは厭だ。
折角降りた夜の帳が、掻き乱れて捲れ上がってしまう気になる。
暝い刻には。
静寂が合う。
身をゆっくりと返す。

女は片手を床に突き、もう一方の手で喉を押さえていた。下を向いた乳房が揺れている。荒く息をしているのだろう。

「――どういうつもりサ」

漸く、言葉が通じた。

「死んじまうじゃないか」

殺すつもりだったのだ。

「あ――妾みたいな女郎縊り殺したって、盗るものなんか何もありゃアしないよ。それとも何かい、あんた、気を遣る時に敵娼の首絞める癖でも――あんのかい」

「そんなものはねえよ」

体を重ねたからといって気を遣っていた訳でもない。銭で買ったというだけだ。姦すも縊るも同じことである。

じゃあ何なのサと女は言う。

殺そうと思ったのだ。でも。

お前を殺したかったんじゃない。

慥かに殺そうとは思ったが、別にお前のような女郎を殺したかった訳じゃないのだ。

それに。

どうも、首を絞めるのはあまり良くない。汚らしい。滑稽だ。見てくれが悪い。穢いのは好まない。

喉笛を切り裂く方が良い。

同じ流れ出るのでも――。

いや。

流れ出るんじゃない、迸るのだ。
血は。
迷惑さと女は言う。
「乗っかるだけじゃァ気が済まない客ってのは居るけどサ。でも大抵は梲の上がらない表六玉さね。この間、彼方此方舐めたり齧ったりしたがる助平爺がいたけどね。ありゃあもう己のお道具が役に立たなくなってるからだよ。あんたみたいな男前がどういう料簡だか」
「能く喋るな」
「そうサ。なァに、することしてれば喋りやしないよ。口動かしてる暇ァないからね。サァどうするんだい。まだ途中だろうよ。もうお終いかい。それとも続きをすんのかい。すんなら早くしとくれ。尤も、また縊られるのだけは御免だけど――」
「女はそんなに喋るもんじゃねえ」
「フン。なら客は女郎の首絞めるもんじゃないよ」
「そうか」
「痛いじゃないか」
「痛いのは厭か」
「当たり前さ。苦しいだろ」
「苦しいのも――厭か」
「死んじまうだろ」
「死ぬのは――厭か」
厭なのか。
何サ心中でもするつもりだったかいと女は言う。

女は歳三の羽織っていた襦袢をするりと引いて、自らにかけた。
背中が顕になる。
夜気が体中に染みる。
女は擦り寄って来る。
「まあ、こんな佳い男の道行きの相手に選ばれたてェのは、嬉しくないこたァないけどねェ」
女の指先が歳三の喉に触れた。
払い除ける。
「無理心中は御勘弁サ。大体心中するにしたって首絞めるなんて聞いたことがないよ。女郎と心中するンなら、精精手首切るとか、いいや大抵は入水だろ」
「俺は」
死ぬ気はない。
女は頸を擦る。
「まったく、巫山戯るにも程があるよ。気が遠くなったわいな。まだ痛いじゃないか。痣にでもなってちゃあ堪らないからね。商売あがったりだものさ。爺の歯形の方がずっとマシだよゥ。咬まれる程に客が付くんだとか何とか、物は言い様だもの。でも首絞めの指の痕じゃあ、言い訳は効かないじゃないかえ。何するんだろうねえ。どうだい、痕は付いてないかえ」
昏くて見えねえよと言った。
「痣になってたらおまんまの喰い上げだよ」
「なら」
死ねば好かったのに。
薬をやるよと歳三は言った。

「薬かえ」
「打ち身や捻挫に効くそうだ。なら効くのじゃねえか」
歳三は裸のまま立ち上がり、荷から薬を出した。
「何だい。商売物かね」
「おう」
「おや、あんた薬売りかね」
「薬売りだよ」
薬売りになってしまったのだ。
ふうん、と女は鼻を鳴らした。
「そうは見えないけどね。二本差じゃないにしろ、まともな渡世には見えないよ」
「何も差してねえよ」
「そうかね。それにしても本当におかしな男さね。効くそうだ――はないのじゃないかえ。商売物なら効くと言えばいいだろ」
「効くかどうか知らねえもの」
「何だね。紛い物かね」
「さあな。客は皆、効くと謂うから、効くのだろう。骨が折れたが繋がっただの、切り傷が塞がっただの、言う奴は言う」
歳三は服まない。
一袋差し出すと女は受け取った。
繁繁と眺めているが、どうせ字など読めはしまい。文字を知っていたとしても、こう暗くては見えるものではない。

「俺の家の伝来の薬だ。河童に製法を教わったそうだが、それは嘘だろう」
女は顔を顰めた。
「何だね。膏薬かね」
「服むんだよ」
「イヤだ、大丈夫なのかい。今度は石見銀山でも飲ませるつもりじゃないだろね」
毒殺など――。
するものか。
「毒じゃあねえよ。そりゃ干した溝蕎麦の黒焼だからな。秘伝も糞もねえのさ。まあ、採る場所は決まってて、作るコツのようなもんもあるんだろうが、何処にでも生えてるもので出来てるんだ。悪くったって腹瀉すだけだろうぜ。ただ、水で服むんじゃねえぞ。燗酒で服め」
「おや」
「熱燗だぞ。そうでねえと効かねえんだと。日に一包みだ」
「効くのかい」
「だから知らねえよ」
厭なら捨てろと歳三は言った。
「だって売り物だろ」
「呉れてやったらもう売り物じゃねえ。好きにしろ」
じゃあ貰っとくよと女は言った。
そして黙った。
下帯を着ける。
どうすんのサと女は言う。

煩瑣い女だ。
「何を」
「しないのかい」
「急くじゃねえか。江戸の廓じゃあるめえ。回しはねえのだろ」
銭は多目に出してある。
「そんなもんはないけどサ、何もしないなら妾は寝たいのサ。宿場の飯盛りは、飯盛りなりに小忙しいんだよゥ。でも」
女は物憂げに歳三を見る。
「でも何だ」
「そのさ——寝てる間に殺られちまっちゃァねえ」
「殺らねえよ」
気が失せた。
すっかり失せた。
「お前が朝までここにいるこたァねえだろう。寝てえなら女中部屋に帰って寝ろ」
何から何まで変な客だよと女は言って、手拭いか何かで股座を拭うと、襦袢を腰紐で括り、衣類を手繰り寄せた。
「男前だし気前は好いし、善い客が付いたと思うたに。とんだ見込み違いサ。朝飯はどうするね」
要らぬと言った。
「早発ちかね」
「ああ」

いま発ちたいくらいだ。
殺せないなら。
さっさと往ねと言った。女は着物だの帯だの腰巻きだのを丸めて抱き締め、のったりと立ち上がった。
「いいのかい。行くよ」
「行け」
女は抓んだ薬の袋を示し、貰っとくよと言って襖に手をかけた。
「本当に妙なお客だよ」
一度振り向き、そう捨て台詞を残して、女は廊下に出ると後ろ手で襖を閉めた。
隙間が空いている。
放っておくかと思ったが、どうにも気になったので閉め直した。
乱れた床の上に半裸のまま横たわる。矢張り。
殺しておけば良かったか。
――いや。
絞殺は、性に合わぬ。
十二の頃に首吊りを見た。
歳三の生家は近在でも一二を争う豪農であったが、郷里の石田村自体はそれ程豊かな処ではない。貧しい小作も沢山いた。
その家も貧しかった。どうやって活計を立てていたものか、多分、玉川が溢れた時に家財が流され、暮らしに窮したのだと思う。歳三の家も半壊したが、母屋は残ったので移築した。今思えばそれも蓄えがあったから出来たことだったのであろう。

首吊りだ首吊りだという声を聞いて、矢も盾も堪らず見物に行った。
死んでいるのだ。
人が。
人垣を分けて飛び込んで、そして見た。
あまり面白くなかった。
ぶら下がっていたのは老爺と、出戻りの孫娘の二人だった。どちらも頸が長く伸び、洟だの涎だのが垂れていて汚らしかった。土間にも汚物が溜まっていた。
見知った顔の筈が、人相が変わってしまって見慣れない。おまけに舌まで出している。見窄らしいというか、何か巫山戯ているようにしか思えなかった。小馬鹿にされているようにさえ思えた。
臭いしつまらないので、鼻を押さえて外に出た。
悪童でも首吊りは怖えかいと謂われた。
――そうじゃねえ。
穢いのが嫌いなのだ。
同じ死ぬのでも大違いだ。
縊死は、駄目だ。頸を絞めるのも、結局は首吊りと変わらないのだ。汚らしい。体液が流れ出て、顔が浮腫んで、醜くて不潔で、凡そいただけない。
好きじゃない。
歳三が女の頸を絞めたのは二度目である。
一度目は、十七の時だ。
その時も殺せなかった。

奉公先のお店の女中で、三つ齢上の色白の女だった。もう名前も覚えていないけれど、肌理の細かい白い肌は能く覚えている。

何かと言い寄って来るので、殺してやろうと思い、誘いに乗った。

それだけだ。

殺す頃合いを見計らっているうちに、深い仲になった。縁が濃くなれば殺し難くなると思ったから、ある日関係を見切って頸を絞めた。

矢張り情交中に絞めた。女は暴れた。

大声を出して暴れて、遂には人が来た。女は、歳三を指差し、手込めにされたと嘘を言った。何度も弄ばれて、子が出来たので殺そうとしたのだと、大嘘を吐いた。

孕んでいたのは本当かもしれなかった。しかし、それは歳三の子かどうかは判らない。

いや、それは多分、違うのだ。女はその店の番頭とより深い仲だったのだ。

歳三はそのことを知っていた。だが、別にどうでも良かった。他に男がいようと孕み女であろうと、知ったことではない。

殺そうと思っていたのだから。

その時は大事になった。孕ませただけならば添わせるなり何なり決着の付けようもあるが、殺めようとしたとなると話は別――のようだった。

日野宿の名主である義兄の彦五郎がやって来て、詫びた。

歳三は一切の申し開きをしなかった。

ただ番頭の顔を睨め付けただけである。

番頭の顔は強張っていた。番頭にしてみれば、己と女の仲を知った歳三が妬気に駆られ、揚げ句凶行に及んだのだと――そう思えたに違いない。

勘違いである。
殺してみたかっただけだ。
謝りもしなかったが、言い訳もしなかった。歳三は終始無言で、女ではなく番頭を見続けた。
番頭には女房がいた。
主の周旋で娶った妻だった。だから番頭は、女との仲を表沙汰にしたくなかったのだろう。
歳三の沈黙は、あの男にとって何よりの脅威であったに違いない。
案の定、番頭はあることないことを語り、執り成してくれた。暇は出されたが、それ以上の罰はなかった。女の腹の子はどうなったのか知らない。里子に出すような話だったか。いずれ歳三の子ということにされたのだろう。女も、ほとぼりが冷めてから別の店に移らせるという話だったように思う。
番頭にとって、歳三の起こした騒ぎは好都合だったということになるだろう。だが、歳三は甚だ不満であった。
殺せなかったからだ。
――だが。
やり遂げていたとしても満足はしていなかっただろう。矢張り絞殺というのは歳三の好むところではないのだ。
そして。
歳三は思い出す。
あれは、まだ七つか八つか、そのくらいの時分のことだ。
母はもう死んでいたと思う。だが死んで間もなかったという覚えもあるし、死んだ前後に遠出をした覚えもないから、ならばそのくらいの齢だった筈だ。

歳三は姉と歩いていた。
何か用があったのか、なかったのか、何も覚えていない。手を引かれて玉川沿いに府中本宿の方へ向かっていたのだと思う。
思い出される景色は、迚も見慣れたものだ。そこで生れ育ったのだから当たり前である。
建物町並みと違い、山だの川だのというものはいずれもそう代わり映えのしないものだ。木があって草が生えていて、後は河川や池沼があるかないかだ。形は違っていても、大した差異はない。田圃や畑などは何処も同じようなものだ。
野山の色合いは、季節によって変わるというだけで、何処も彼処も凡て一緒だ。
海はまた違うのだろう。
歳三は、海の景を知らない。
野山や里は、能く知っている。
だからこそ、その時の細かな景観が歳三には特定出来ない。そもそも生れてからずっと眺め続けている景観のひとつなのである。何度も何度も見ているのだから、思い出すとかいう類いのものではないのだ。
その所為か、記憶の中の風景自体は豪くぼんやりしている。それがどの辺りだったのかも明瞭には判らない。
忘れたことなどないというのに。
十五くらいの頃、川筋を辿ってその場所を探してみたことがある。
それらしい場所は何箇所か見付けたのだけれど、結局のところは能く判らなかった。
あれは——。